

2023年12月24日 No.3699

先週の講壇から

「祝福されない子」

マタイによる福音書 第1章1節8～25節

聖句「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。」(1:18)

1. 《捨て子物語》 1973年前後、生後間もない赤ん坊がコインロッカーに遺棄される事件が頻発しました。世に言う「コインロッカーベイビー」です。2000年以後は、シングルマザーの社会的認知度も高まりましたが、今でも諸事情から親が赤ん坊を育てられず、「赤ちゃんポスト」に託されるケースがあります。ローマ帝国時代にも、女神ウェスタの神殿には新生児が置き去りにされたそうです。
2. 《両親の苦悩》 後に、マリアとヨセフの間には、イエス以外にも4人の男児と2人以上の女兒が生まれています。どうして主の誕生は結婚前（婚約期間中）でなければならなかったのでしょうか。中学生くらいの女の子であったマリアが、どんなに深い苦悩と恐怖に突き落とされたことでしょうか。ヨセフは、マリアの胎の子が自分の子ではないことを一番よく知っていました。憎悪と嫉妬に責め苛まれ、夜毎、悔し涙に咽び泣いたことでしょう。周囲の人たちに対しても疑心暗鬼になったことでしょう。二人とも地獄を味わったのです。共に苦しむ二人でありながら、お互いの心は通じ合わず、各々に苦しむのです。その意味では、イエスさまの誕生は両親からも望まれていなかった。祝福されなかったのです。
3. 《御子の物語》 マリアとヨセフが苦悩を味わっていた時にも、イエスさまは共に居られたのです。忌々しき問題、抜き差しならない問題として存在していたのです。「インマヌエル／神は我々と共におられる」は、直ちに問題を解決してくれる特効薬でも、解決の道筋を示す模範解答でもありません。けれども、二人の信頼関係が修復されるまで、イエスさまは二人の間に居座り続けたのです。絶対に解きほぐすことの出来ぬ「ゴルディオスの結び目」を、アレクサンドロスが一刀両断にしたという逸話があります。「思いも寄らぬ解決」の喩えに使われますが、そんなに世界は単純ではないと私は思います。むしろ、安易な解決は何も無いと、降誕物語から示されます。それでも関係修復の道は確かにあるのです。悩み苦しみながらも求め続けるプロセスの中に、主は共に居られるのです。

朝日研一朗牧師